

# Civi note

①

高松市美術館  
ボランティア通信  
2000年10月創刊号

YOROSHIKU

し び の ー と



みなさん、こんにちは！  
Civi noteです！



ギャラリートーク



編集風景

みなさん、こんにちは！Civiです！といっても、多分ほとんどの方が「Civiって、いったい何者？」とお思いでしょう。その活動内容も名称も、まだ、みなさんにはほとんど馴染みがないのではないのでしょうか。では、あらためまして自己紹介をさせていただきます。

Civi(シヴィ)とは高松市美術館ボランティアの名称です。英語の〈civil＝一般市民〉とく高松市美術館＝市美(しび)の2つの言葉が掛け合わせられており、市民の皆様は美術(館)を身近に感じていただきたいという思いが込められています。

メンバーは現在24名。主な活動は、美術館主催の特別展でのギャラリートーク(展示解説)です。日々、試行錯誤の連続ですが、みんな楽しみながら活動を続けています。

そして、その活動も昨秋に開催された「ハーバード大学コレクション展」で初めてギャラリートークを経験してから1年を迎えようとしています。「もう1年」「まだ1年」と私たちの思いはそれぞれですが、この1周年を機に、Civiの活動内容を、より多くの方々に知っていただくため、「Civi note(しびのーと)」を発行することになりました。

Civi noteの創刊により、私たちCiviはその活動の幅を広げます。美術館とみなさんのかけ橋となり、美術館での体験が楽しく充実したものとなるためのお手伝いができればと願っています。これからのCiviにご期待ください！

[藤内一三]

創刊によせて

市民のみなさんと美術館の「かけ橋」となるべく誕生した美術館ボランティア「Civi」の活動も、早一年。開かれた美術館をめざし、特別展にギャラリートークという新風を送りつけていますが、さらにこの度、自らの活動記録とメッセージを綴った「Civi note」を発行することになりました。この発信基地「Civi note」において、読者のみなさんと「Civi」のメンバーによる密なる交信が繰り返られること、そして、個々の人々がそのことによって芸術の醍醐味や表現の可能性をより楽しむこととなりますよう心から願っております。

高松市美術館館長 村上俊正

# Civiはこんな活動をしてきました。

## 主な活動

### 1999年

- 1・16 ★高松市美術館の概要、他／角節郎(高松市美術館館長) 他
- 1・30 ★ボランティア活動の根源的なもの一見することを楽しむ、人と触れることを楽しむ／森本孝(三重県立美術館普及課主査)
- 2・6 ★アートゲームを始めよう／平田健生(滋賀県立近代美術館学芸員)
- 2・27 ★あるいは、美術とは「見る」ものでないのかもしれない?／黒沢伸(フリーキュレーター・金沢市現代美術館建設事務局・元水戸芸術館学芸員)
- 3・20 ★フランス、カナダなどの美術館における教育活動／岡部あおみ(国際日本文化研究センター客員助教授、メルシャン軽井沢美術館チーフキュレーター)
- 4・17 ★日本画の技法／妻島健(日本画家)
- 5・29 ★Love's Body展—ヌード写真の近現代／笠原美智子(東京都写真美術館学芸員)
- 6・19 ★公開相談—美術と美術館に関する、教育的な配慮を伴った活動をめぐって／齋正弘(宮城県美術館造形科長)
- 7・3 ★「DOME」を通してみた日本の美術館教育について／山本育夫(ミュージアムマガジン「DOME」編集長)
- 7・17 ★日本・現代・美術／樺木野衣(美術批評家)
- 7・31 ★揺らぐ「芸術」—19世紀フランスの社会と芸術の居場所／天野知香(お茶の水女子大学助教授)
- 8・7 ★教育プロジェクトとしての「アジア美術館」／黒田雷児(福岡アジア美術館学芸員)
- 10・9~11・14 「モダンアートの100年—ハーバード大学コレクション展」ギャラリートーク
- 11・27 「絵画への招待—人・街・宇宙」展(香川県文化会館)の鑑賞
- 12・4 「みずのき寮からの発信」展(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)、小沢剛讃岐醤油画資料館を鑑賞

### 美術館ボランティア養成講座を受講して

8カ月間にわたる養成講座は、高松市美術館概要の説明に始まり、多様な美術活動の線で活躍する外部講師陣による国内外の美術(館)の取り組みや可能性、そして美術史への新しい眼差しなど、興味深いレクチャーの連続でした。それら20回の講座を終え、新しい世界へと視野の広がりを、実感した私たちは、美術作品の魅力を追求め、それらを伝えていく興味が一段と増したのです。

### ギャラリートークを体験して

「美術館ボランティアCiviと作品の鑑賞を一緒にしませんか?」と、特別展会期中の毎日曜日と祝日の午前11時〜、と午後2時〜の1日2回、Civiメンバーがローテーションを組み、それぞれのスタイルとスタンスで、ギャラリートークに挑戦することになりました。

### となりまち 坂出、丸亀へ足を延ばして

昨年の師走、私たちはちよち坂出にある讃岐醤油画資料館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館へと出かけていきました。丸亀では「みずのき寮からの発信」展についてのお話を伺いました。京都の施設「みずのき寮」の絵画教室の作家11人による約100点の絵画作品は、内なる思いを表現するための手だてを得て、生き生きとした喜びにあふれていて引き込まれました。ここでギャラリートークは、話のさしどころも自然で、展示作品と一体化して、今後のトークのヒントとなりました。

### アンケート調査を終えて

「レブラント版画展」の最終日、初めての聞き取りによるアンケート調査を行ない、十数人の方々から、Civiのギャラリートークについての感想を聞かせていただきました。「ギャラリートークを聞けてよかった」という感想が多かったのは、喜びとも励みともなりましたが、一方、「トークの時間の長さ」「次の作品に移るまでの間のとりかた」「話し方」などの間からの課題となるべき指摘もありました。今後は、一方的な発信に陥ることなく、皆さんの鑑賞を楽しむうえで、皆さんのよい役割を担えるようになりたいと考えています。

携わりながらも、「美術が好き」をベースに私たちCiviメンバーが展開するこれからの活動が、多少とも文化的に社会へと還元されえたらと考えます。その一歩として、作品が輝いて見えるよう、自分の言葉による等身大のギャラリートークが実現でき、作品とのふれあいを通じて鑑賞者のみなさんと喜びや感動を分かち合えればと思います。みなさんから、「美術は面白い!」を引き出すこととなるようなメッセージを届けたい、と強い思いが湧いてくる養成期間でした。

初めてのトークは「ハーバード大学コレクション展」。各人の資料収集から始まり、原稿作成の準備に明け暮れ、持ち寄りの勉強会、そして作品を前に本番さながらのリハーサル。トークの当日が近づき、緊張感と不安を抱きながら、やっと私たちは一歩を踏み出したのです。手探りから始まり回数を重ねた今、作品が表現しうるものを言葉で伝えることの難しさを痛感しつつも、トーク後には爽快感で満たされるようにもなりました。

弘法筆を選ばずとも、醤油は選ぶ?



讃岐醤油画資料館の副館長さん



榎原信子

### 2000年

- 1・28~2・6 「高松市美術館コレクション展—戦後美術の9作家—」ギャラリートーク
- 2・25~3・26 「パリのカフェと画家たち展」ギャラリートーク
- 4・22~5・21 「没後100年 シスレー展—フランス・印象派の詩情」ギャラリートーク
- 6・2~7・2 「日蘭交流400周年 レンブラント版画展」ギャラリートーク
- 6・17 ★アートなんてこわくない／福のり子(インディペンデント・キュレーター)
- 7・1 ★市民との共同プロジェクトの可能性—「幻想植物園」展はどのようにつくられたのか!?／端山聡子(平塚市美術館学芸員)
- 7・2 「レンブラント版画展」においてアンケート調査
- 8・5 ★グラフィックデザインの現場から／福井ひでみ(グラフィックデザイナー・兼イラストレーター)

★は美術館ボランティア養成講座および美術館ボランティア講座をしめします。

# アートなんてこわくない!

福のり子さんの  
レクチャーから



福のり子さんは、染織作家として活躍後、1987年に渡米。コロンビア大学大学院を卒業したのちニューヨーク近代美術館(MOMA)で研修員として勤務し、現在は米国でインディペンデント・キュレーターとして展覧会企画、執筆などで活躍されています。98年に発行された『なぜ、これがアートなの?』(アメリア・アレナス著/淡交社)の翻訳者でもある彼女が、アメリカの美術館教育プログラムを軸に、大阪弁による名物レクチャーを展開しました。タイトルは「アートなんてこわくない」。

アートの歴史を通して、市民にとってなぜアートが遠い存在になったのかということの説明の後、アメリカの美術館が「ひと」中心であると言われるのは、その歴史が浅いために芸術面で自国の文化を生み出すためには、一般市民の文化レベルを高める必要があったことが語られました。だからアメリカでは、美術館など皆で文化を理解、共有、創造するための施設や機構がより発達しているとも。しかし、そのアメリカでさえ鑑賞者に対して、一方通行の美学・美術史的な知識しか提供できず、ギャラリートークの回数を

増やすなどの試みが減されましたが、人々の美術に対する理解や親和を促すことはできなかったということでした。

1970年代になるとそれまでの反省から、鑑賞者(一般市民)の美術に対する意識の発達が、作品自体やその歴史を知るという知識・ハードの問題ではなく、むしろ個人の感性などのソフト面の発達に依存するのではないか、ということが言われ始めたそうです。そこで鑑賞者が「参加」できる美術館を作るため、来館者を知るためにMOMAでもいろいろな試みが行われました。

例えば、ある作品について来館者に、頭に浮かんだ好きな事を思いつくままに言ってもらい、それを録音して一つ一つカードに書き起こします。カードの裏にはその発言者の社会的なデータを細かく書き込み、それらを心理学者、美術史家、教育学者や統計学者たちのチームに分析させたのです。その結果、美術館に来る人の美術的意識には大まかに分けて5つの段階があることが分かりました。第1は「物語の段階」、第2は「構築の段階」、第3は「分析の段階」、第4は「解釈の段階」、そして第5が「創造の段階」です。そして来館者のほとんどが、作品との相互コミュニケーションにまでは至らない1~3段階のレベルに集中しており、第5段階の、作品との出会いを通して自己の創造域にまで達する人はごく僅かであったこと。そのため、大多数を占める初期段階の人に興味を持ってもらえるような美術館活動の必要性から、「V.T.C(Visual Thinking Curriculum)」という鑑賞プログラムが生まれたそうです。

ここで私たちは、福さんの質問「なんで!?!」に答える形で、ゴッホの椅子の絵を題材に、「V.T.C」に基づいたワークショップ=作品とのコミュニケーションを行ないました。例えば、「何に目がゆく?—椅子」、「どんな椅子?—古くて座り心地がよさそうな木の椅子」、「どうしてそう思う?—一節があって座席の色が黒くなっている」、「椅子の上にあるパイプでどんな人を想像する?—一時間にゆりのある年寄り、こだわりを持つ

男性」。このように、作品を見て読み説いていき作品とコミュニケーションを積み重ねる中で、作品から様々なことを引き出せるということを私たちも実感することができました。そして、優れた作品ほど深いコミュニケーションに対して、開かれた答えがあるということでした。

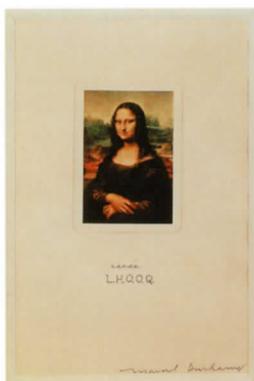
アート作品は、見る人の心との間にコミュニケーションがあって初めて「アート」になります。アートと鑑賞者とのコミュニケーションは、キャッチボールに似ています。そして、アートと鑑賞者との間で、思いもかけない何かが生まれるキャッチボールとなる手伝いとして、私たちciviの可能性があると。アートと鑑賞者それぞれが持っているものをベースに、コミュニケーションを引き出す重要な役割の担い手一人一人であると、私たちは福さんからエールを送られました。

【富岡洋子・毛利直子】



2000年6月17日 福のり子さんのレクチャーを受講

《ひげをそったL.H.O.O.Q》  
(1965)  
トランプカード  
8.8×6.2cm  
高松市美術館蔵



《L.H.O.O.Q》(1964)  
複製・鉛筆  
26.8×17.8cm  
高松市美術館蔵

civiが👁️見た! — 1

## 高松市美術館 コレクション

自分の作品を逆手に取った「しゃれ」のうまさに、ただただ脱帽です。

【能瀬京子】

1965年には、既製のトランプに、今度は何も手を加えず「ひげをそったL.H.O.O.Q」と形容詞をひとつつけただけで発表しました。

私たちには、画家の卓越した技術のもと、本物そっくり、否、それ以上に美しく表現されたものこそ素晴らしいといった美術への思いが、心のどこかにひそんでいっているのではないのでしょうか?だから、既製の複製絵葉書に鉛筆で髭を書き込んだだけのいたづらがきのような本作を目の前にすると、「これがアートなの?」とビックリしてしまうのです。

《モナリザ》の顔に「髭」が!? 1919年、この作品を目にした人々の驚きが容易に想像できます。レオナルド・ダ・ヴィンチの傑作に、髭を書いた人こそレディ・メイド(既製品を美術として提示する手法)の先駆者マルセル・デュシャン(仏、1887-1968)です。現在、見てもちよっと、ビックリします。

コミニティ  
コホ

在日アメリカ大使館には、アートギャラリーがあります。残念ながら一般公開はされていませんが、ホームページ上で公開されています。高松にゆかりの深いイサムノグチの彫刻もご紹介します。現代アートの作家も。http://www.Embassy.state.gov/tokyo/wwwarts.html

# あつたて

## 美術館 1

civiといっしょに美術館を探索してみませんか。今回はエントランスホールです。

高松市美術館に入るとすぐのところはエントランスホールがあります。そこは、ショップにグに訪れた人々や近所のサラリーマン・OLたちが、ふらっと立ち寄っていく「憩いの場」です。広々とした内部の空間には、ガラスの天井から降り注ぐ光が満ち、明るい雰囲気をかもし出しています。

エントランスホールのちょうど真ん中には4メートル近い高さの黒御影石の作品がすくくと立っています。彫刻家・流政之さんの《ながればち》です。



《ながればち》(1998) 黒御影石  
42X156X353cm



かつて手がけたことのある刀剣の反りを感じさせる、鋭い曲線。表面をじっくり見ようとするとき、そこには映り込んだ自分の顔がこちらをのぞいていてびっくり！それくらい見事に磨かれているのです。

1923年長崎に生まれた流政之さんは、東京、京都、北陸、山陰と各地を転々とし、1960年、石彫刻に適した少雨と温暖な気候、そして伝統に培われた高い技術を持つ石工たちに魅力を感じ、香川県庵治町にやって来ました。ここで多くの人との出会いがあり、1966年、庵治町東



海岸にナガレスタジオを構えたそうです。

その作品の特徴は、彫りを少なくし、磨いた面と割った面により石を活かす技法「ワレハダ」にあります。また作品にはそれぞれユニークな名前がつけられていて、見る者に親しみと面白さを感じさせます。《おいでませ(いらっしやいませの意)》(香川県文化会館の玄関前)、《またきま(また来てねの意)》(五色台)、《どだま獅子》(坂出・瀬戸大橋記念公園)そして《ながればち》(屋島・四国村)など、きつと皆さんどこかで目にかかっているはず。

またこの《ながればち》には、他に同じ名前を持つ兄弟がたぐさんありますので、日本のどこかで、い海外でも出会えるかもしれませんよ！さて、美術館のこんなところをもっと知りたいという方、ぜひciviまでご連絡ください。総力をかけて探検します。

連絡先: 760-010027  
高松市紺屋町10-4  
高松市美術館内  
civi note  
知った？美術館係

「石原ミエ子・吉田光子」

## 美術館の今後の予定 [横井真由美]



《ポリビアの少女 ミスケ》(1980)  
©デビッド・バーネット CONTACT Press Images

### ロバート・キャバ賞展 - 20世紀と人間 2000.9.22(金)~10.22(日)

最も偉大な報道写真家として知られているロバート・キャバを称えて制定されたロバート・キャバ賞。世界で初めてとなるこの展覧会では、受賞者34名の受賞作品220点余とキャバ本人の代表作を展示するものです。人間への深い愛を感じさせつつも、歴史の目撃者である写真から、私達の未来に思いを馳せたいものです。

### 英国・アバディーン美術館所蔵 - イギリス・フランス近代名画展 2000.11.2(木)~12.3(日)

「長崎のグラバー邸」で知られるトーマス・B・グラバーの出身地・アバディーンには、市民からの寄贈作品を基に1885年に開館され、現在、西洋美術史上において重要な作品を数多く収蔵する美術館があります。海外でまとまった形でコレクション公開はこれが初めてであり、日本で紹介される機会の少なかったスコットランド絵画をはじめ、ターナーやロッセッティ、モネなどイギリス・フランス近代絵画の珠玉80点で綴る展覧会です。

### マティスとモデルたち展 2001.1.12(金)~2.12(月・祝)

20世紀美術を代表する画家アンリ・マティスは、たえず新たな可能性を追求し、いつの時代にもすぐれた作品を残しました。本展覧会では、マティスの人物表現に焦点を絞り、油彩、素描、版画を紹介します。

### 高松市美術館コレクション展 2001.3.9(金)~3.25(日)

特定のテーマに基づき、高松市美術館のコレクションを紹介します。

## 私達と鑑賞をご一緒しませんか？

美術館ボランティア「civi(シヴィ)」によるギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日および祝日の午前11時~、午後2時~1日2回、2階展示室にて行います。

作品や作家などの知られざるエピソードが聞けるかも？

### 編 ● 集 ● 後 ● 記

8月25日、高松は真夏日連続57日で記録を更新中。創刊号の編集を終えた感想は「記者もどき苦楽を初体験」「事実は記事より面白い」「大変だったが発見も多かった」等々。そして私達の「熱い夏」は終わった。

編集スタッフ一同

発行:高松市美術館  
編集:civi デザイン・イラスト:福井ひでみ

今年2月東京で、私もメンバーの一人である「教育普及ワーキンググループ」は、『美術館・教育普及の可能性』をテーマに、全国の美術館学芸員を対象にした研修会を開催した。日本の美術館における教育普及活動の重要性が館内外から説かれるようになった昨今だが、その体系化や見直しは真摯に進んでいる。美術は個人個人に世界観の拡大をもたらしてくれるもの。美術をツールに、「ワタシはここにいる」という視点と「アナタがそこにいる」という肯定が生まれる「場」でありたい。

毛利直子(高松市美術館学芸員)

civiのメンバーは、ギャラリートークをする際、カタログの解説文を丸暗記して話すのではなく、個々が自分の言葉で語ろうと努めています。そのほうが話に血が通い、トークが面白くなるからです。civiのもうひとつの活動の場であるcivi noteにおいても、自己満足的な記事は省かれ、読み手が面白さを感じられるような紙面づくりが目指されています。たんなる活動報告の枠を越えた、美術館(館)とその周辺領域を考察する、読み物として充実した媒体となることを願っています。

牧野裕二(高松市美術館学芸員)